

令和7年度 第3回 揖斐川町学校教育の在り方審議会・シンポジウム(議事録概要)

1 日 時 令和7年12月13日(土) <開会>13時30分 <閉会>16時00分

2 場 所 地域交流センター「はなもも」ホール

3 出席者

通常会議委員 秋山 晶則、佐木 みどり、小林 直樹、大西 恵子、椿井 昭二、
中島 勝義、栞原 利樹、安藤 美香、林 利希也、森 允

拡大会議委員 棚橋 慶士、太田 優芽、植山 あおい、久保田 織、柿木 啓輔、
安藤 未釉、若原 琴音

事例発表者 岐阜市教育委員会教育長 水川 和彦

海津市教育委員会教育長 服部 公彦

事務局 教育長 香田 静夫、事務局長 所 貴宏、学校教育課長 富山 哲成、
学校教育課課長補佐兼係長 高橋 由利、学校教育課係長 松浦 亮太

地 域 住 民 121人

4 次 第

(1) 開会挨拶(佐木副委員長)

- ・ 本年度、揖斐川町では「揖斐川町学校教育の在り方審議会」を設置した。少子化や人口減少による学校の小規模化、社会情勢の変化等を踏まえ、子どもたちや地域にとって望ましい学校教育の形は何か、町全体で一緒に考え、方向性を見出したいと考えている。
- ・ 11月から各小学校区において地区集会を順次開催し、様々なご意見を聞かせていただいた。その中で「他の自治体の例を知りたい」という意見があったが、今回のシンポジウムでは実際に学校再編を進めた当事者から2つの事例を発表していただくので、この問題について見識を広げ、揖斐川町の今後を考える材料にさせていただけると幸いである。
- ・ 小林委員より、事例発表者の紹介を行う。

(2) 事例発表1 「海津市立海津小学校の誕生に込めた願い」

- ・ 海津市教育委員会 服部教育長より発表していただく。

(3) 事例発表2 「義務教育学校の魅力と課題」

- ・ 岐阜市教育委員会 水川教育長より発表していただく。

(4) シンポジウム

- ・ 秋山委員長より、登壇者である事例発表者の紹介を再度行う。
- ・ 登壇者である審議会委員より、自己紹介を行う。
- ・ 秋山委員長より、登壇していない審議会委員の紹介を行う。
- ・ 登壇者で意見交流を行う。

委員長：まず、現在の小中学校の教育についてお気づきのことを、審議会委員からお話し
いただきたい。

委員：私の子どもが通っている学校について考えると、ICTを活用した授業を積極的
に行っていることは、若い頃からそういったものに触れる機会をつくるという観
点で、将来を見据えた教育としてすごくよいと常々感じている。

委員：まず生徒数が非常に少なく、1学年1学級であるために6年間同じ環境で過ごすことになるということがある。また、先生方についても、業務が非常に広域的になっており、人数も少ないため、とても大変だと思っている。ただ、小島小学校区については地域の方とつながりが非常に強く、地域と一体となって子どもたちの教育を図っているため、そういった点は非常によいと感じている。

やはり揖斐川町は非常に広く、スクールバスなどの通学に関する様々な問題について検討する必要があるのではないかと。

揖斐川町を離れた人について、他地域出身の方に比べて地元を愛する方が非常に多いという印象があるため、やはり揖斐川町を好きになってもらうことができる教育も必要だと考える。

委員：私は2人の子どもの母親であり、長女は来年度小学校に入学する。揖斐川町のふるさと学習や海外派遣研修、県外交流といった特色ある教育は、町外にもアピールできるすばらしい取り組みだと感じるとともに、少人数ならではのきめ細かな指導ができる環境も魅力的な点だと考える。

一方、今後少子化が進む中で、複式学級ができることにより教育の質の低下や人間関係の固定化が起きるのではないかと懸念がある。また、私の住む地区について、来年度は小学生が私の娘しかおらず、近くの地区の子どもと合流するまで1人で登校しなければならない。さらに、その子どもたちが全員学童保育を利用すれば、娘は1人で下校することになる。ここまで少子化が進んでいる中では、やはり学校の統合は避けられないと個人的には考えている。

統合した場合でも、これまで培った特色ある教育はぜひ継続していただきつつ、海津市のように各地域のよさをすべての地域の方が触れ合えるようにすることで、より豊かな学習や学校生活ができることを期待する。

委員：学校教育の在り方を考える際には、子どもの育ちや発達を主軸において周辺的な課題を考えることが必要である。そこで、今回は「子どもの心理的負担の軽減」に焦点を絞って意見を述べる。

幼児期には自我や存在感、相互性、能動性、自立心を育てていく必要があり、さらに学校教育において存在感や相互性、能動性は継続して育つと言われている。この学校教育にあたる児童期の年齢において、思春期前後の成長期特有の課題の一つとして「人間関係から生じる問題」が指摘されており、その中にある息苦しさや仲間はずれ、いじめ、居場所がないという感覚などの心理的負担を、私たちは軽減させていく必要がある。すなわち、この「心理的負担の軽減」は、学校教育の在り方における課題の一つとして考えなければならないことだと指摘できる。そして、子どもの人間関係における逃げ場や息抜きとしては、環境の変化による気分の一変、例えばクラス替えなどが有効であると言われている。

このことを踏まえて、先ほどの2つの事例発表は私にとって大変学びになった。服部教育長の発表では、統合によって子どもが多くなったことによりトラブル等が増えたとおっしゃったが、このことはヴィゴツキーの「発達の危機」という言葉で説明ができる。この発達の危機とは子どもが育つ時だと言われており、その時に教員がどのように支援するかによって子どもの発達状況が変わるとこの事例は、まさしく日本的な事例だと感じている。

また、文化をつなぐとおっしゃった水川教育長のお話は大変印象的であった。私

が自らの園で幼児教育を実践する中でみていると、2歳の子どもでも「まねる」ということが学びにつながっている。2歳の子どもが年長の子どもをまねることによって知識や技能を獲得し、その後その子たちが6歳になった時には、当時の年長でやっていたことをまねしていると感じる場面もある。同じことが児童期で起きる、しかも義務教育学校の9年間という幅の広さで起きると考えると、より大きく育つだろうという印象をもった。

委員：揖斐地区では令和8年3月に公民館まつりが行われるが、今回も揖斐川中学校の子どもたちに様々に協力していただいております、感謝しています。また、揖斐小学校の子どもたちには「城台山を守る会」で行う植樹活動に協力していただいております、私たちと小学校・中学校の子たちが一緒になって活動していただいていると思っております。

その中で、昨年度の揖斐川町の出生数が48人とのことだが、これは1クラス24人で2クラス分の人数である。ここまで人数が少なくなってくると、当然のことながら統合について考えていかなければならないと感じている。ただ、あくまで私の意見だが、揖斐川町は町域が広くそれぞれの地域性もあるため、すべてを1つに統合するのではなく、いくつかの学校を残すような形にするのがよいのではないかと感じている。また、仮に新たな学校を建てるとなると、広大な土地と多額の予算が必要になると思うので、既存の学校施設をうまく活用しながら新たな教育体制をつくることができるとよい。

最後に、今日発表があった義務教育学校はなかなかよい制度だと思うが、かなりレベルが高いように感じるため、再度勉強してその体制づくりの可否から検討しなければならぬと考えている。

委員長：各委員それぞれの立場から、懸念や期待などの個人の見解について話していただいた。揖斐川町は非常に広大な町域がある一方で、昨年度の出生数は48人となっており、今後の少子化を見据えてどうすべきかを考える必要がある。ただ、やはり子どもを中心に考えるという点については一致した方向である。

ここまでのご発言を受けて、事例発表者からご意見をお聞きしたい。

発表者：先ほどICTの活用に関するご意見があったが、時間や距離を超えたつながりという点では有効な手段であるものの、やはり対面で話をしたり聞いたりする関係が子どもたちにとっては大事である。直接けんかしたり笑い合ったり泣き合ったりする経験がこの時期の子どもたちに一番大事だと思うと、適正規模についてやはり考えていく必要があると感じている。

発表者：1点目に、少人数になることによる人間関係の固定化や複式学級による先生の人数の減少、教育の質の低下という懸念は、ある程度当たっていると私は思う。ただ、例えば1～6年生の縦割りのグループで学級編制をすれば、毎年クラス替えができ、固定化を防ぐことができる。仕組みの変革によって解消できる問題はあり、実際に岐阜市では複式学級や単学級となっている3つの小規模校をICTでつなぐことで、道徳の授業などを3校合同で行っている事例もある。ICTの時代であることを考えると、小規模校でも様々なやり方はあるが、今までのような学校教育の仕組みでは人数が少ないと不利であることは否めないと思われる。

2点目に、心理的負担というご意見に関して、私は子どもたちの成長に大事な自己肯定感を高めるには、子どもたち一人ひとりを量るものさしの多さが大切だと

考える。これを「多次元的尺度」というようだが、足の速さや勉強の得意不得意以外に、幼い子どものお世話が上手にできる、部活動でレギュラーでなくとも努力するといった様々な場面やものさしで見ている人が周囲にすることで、人間は成長する。勉強ができるかどうかだけで教育を考えれば、様々な問題が起きる。学校教育に地域の方を含めた多くの大人が関わって、子どものよさを様々な角度から見ていくという教育をしなければ、学校の仕組みを変えたり統合したりしても変わらないだろうと考えている。

3点目に、私が育った小学校も中学校も統合してなくなっており、これは非常に寂しいことだと感じている。例え統合するとしても、事例発表でも話したように、自分の育っている地域とつながる教育プログラムは絶対に必要である。坂内の子どもは坂内をみる、藤橋の子どもは藤橋をみる、そしてそれぞれの地域の子どもがそれぞれの地域とつながった末に、揖斐川町全体をみる。こうしたプログラムは、学校がどんな形態になっても必要だと思っている。

最後に、義務教育学校はレベルが高いというご意見があったが、それまでの6年・3年という仕組みをリセットしなければいけないので、大変なのは先生である。ただ、例えば事例発表の中で職員室の机をロケーションフリーにしていると話をしたが、子どもにも席替えがあり、一般企業にもロケーションフリーとしているところが多くあるにも関わらず、学校の職員室だけが昔と同じ姿のままだということを変えるべきだと私は思っている。こうした子どもたちのためになるなら何でもやってみる、という柔軟性をもって職員を動かすことが校長として大変な点であり、一緒に取り組む先生方も最初は大変だが、次第によいものだと感じてもらえるので問題はないと考えている。

委員長：事例発表者それぞれが実践される中で、恐らく様々な方を巻き込んで一緒にたくさんの方のアイデアを出しておられる。揖斐川町もこれから非常に難しい状況であるが、ここで再度見つめ直すことで、子どもたちの将来性をより伸ばしていくことができる新たな方向性を目指すべきだと感じた。

ここからは、これからの学校に必要な教育環境についてどのようなものを目標とすべきか、特に教育の内容に関してご提言をいただきたい。

委員：岐阜市の藍川北学園の教室の写真をを見せていただいたが、校舎は新築で建てられたのか。

発表者：新たな校舎を建てるには40～50億円ほど必要になるため、リノベーションで整備している。別途発表があった海津小学校も一部の改修で整備したということだったが、リノベーションであれば7～8億円ほどで整備でき、それでも校内に入ると新築のように見える建物にはなるので、やり方次第である。

学校の教室の景色は学制発布から150年変わっていないため、私は教室の景色を変えることは学びが変わっていることの証拠になると考えており、これによって先生の授業が変わると思っている。前後の壁が天井まで一面ホワイトボードという藍川北学園の新たな教室では、先生たちも子どもたちも最初はどこを見てよいかわからなかったようだが、例えば先生が板書をした後に、次の授業ではもう片方のホワイトボードを使うことで、前の授業の内容を消さずにそのまま残すことができる。このように少しずつ変化が起きているが、それが7～8億円のできるようになったという実感がある。

- 委員：次に、海津小学校においてバスで子どもたちを送迎しているテレビの映像が出されていたが、その映像では大きなバスであったように見えた。このバスは、主要な道路ばかり運行しているのか。小さな路地を走るようなことはないのか。
- 発表者：大きく見えたかもしれないが、中型のバスを使用しており、小さな路地にも恐らく入ることはできると思われる。ルートとしては基本的に安全なところを運行している状況である。
- 委員：子どもたちには停留所まで出てきてもらい、そこにバスが迎えに行くという方式か。時間どおりに迎えには来るのか。
- 発表者：その時にバスがいる場所がスマホでわかるシステムもあるが、もちろん定時にそれぞれの停留所のところに到着するようにはなっている。
- また、どのバスもおよそ30分程度で学校に到着するようなルートを作っている。
- 委員：海津小学校の校舎の前身である高須小学校は、もともと28教室と多くの教室があったために、1つに統合しても問題ない収容能力があったということか。
- 発表者：新しい学校になるにあたり、古い校舎の一部建て替えや増築は行っている。
- 委員：統合にあたり、学校の遠方に住まれている方から、通学に不便になるというような意見は出されたか。
- 発表者：基本的にある程度の距離であればバスが迎えにくるので、それまで通っていた学校までの距離よりも停留所までの方がむしろ近くなっている子も多く、不便にはなっていないと考える。
- 委員：お二人の発表を聞いていて、本当に柔軟性をもちながら子どもを中心に考えていらっしゃることに非常に刺激を受けた。多面的なものさしによって様々な角度から子どもを見るというお話は大変すばらしく、子どもの成長・発達に非常に意義があると感じている。先ほど学校教育においても存在感や相互性、能動性が継続して育つと言われていると話をしたが、この存在感とは「ここにあってよい私」「何かをすればよい私」というものであり、相互性とはコミュニケーション能力、人と関わる力のことであり、能動性とはやる気や意欲といったものだが、これが育つのは仲間集団の中であると様々な研究者が言っている。先ほどおっしゃった様々な子どもがいるということは、やはりこれまでの心理学的研究の裏付けにもなると感じている。
- 委員：先日の地区集會に参加した中で出されたご意見として、他の地区でも同じく出た内容だと思うが、地域とのつながりをどのようにするのかというお話があった。私もやはり保護者だけではなく地域の方とどうやって子どもたちを育て上げていくか、ということが大事だと考えている。また、それと同時に揖斐川町の教育における独自性や地域とのつながりの強さという特色を生かした、他地域から引っ越してきてもらえるような環境づくりも必要ではないかと思っている。
- そのうえで、先ほどの発表を聞いた中で義務教育学校は非常に魅力的であり、揖斐川町にも合っているように感じたが、この制度について何らかのデメリットがあれば教えていただきたい。
- 発表者：発表の中でも伝えたが、中学生が小学生と一緒に登校するような景色は、日本ではあまり見られない。だが、事例として挙げた藍川北学園や白川郷学園の子どもたちを見ていると、頼られる、または自分が優しくしたことが相手の笑顔につながるという経験は、児童生徒の自己肯定感の育成に大きくつながると感じる。義

義務教育学校では1年生と9年生を除く7年間、上級生も下級生もいる環境が続くが、こうした仕組みが社会の中で好かれる人間として育てるうえで一番重要なファクターだということを、義務教育学校に関わりながら思っている。

一方で、誤解を恐れずに言うと、進学に関して、中学3年生で下級生と関わっている時間があれば勉強してほしいと考える保護者にとっては、そうした時間を無駄だと思われるのではないかと考えるところはある。ただ、藍川北学園、白川郷学園ともにいわゆる進学校に行った子も何人もいるが、そうしたご意見は聞いていないので、それ以上に子どもたちがうまく両立しているのだろうと感じている。

委員：PTAに参加していると、先生方は限られた時間の中で業務がたくさんある一方で人数が減っており、非常に大変だと感じている。そういう面で先生や地域の力を集結できる義務教育学校にはメリットが多いだろうと思う一方で、デメリットも様々であるのではないかとということが気になって質問した。

発表者：別のデメリットとして、先ほども言ったように先生方の考え方を变えることが大切で、私も白川郷学園の校長になった最初の半年間は大変だったが、時間が経つうちに先生方が「こういった学校はいいな」と思ってくれさるとよいと思っていた。藍川北学園については、夏休みに教育長として訪問し、思っていることを全部出してもらえようすべての先生方とやり取りをした。そのくらいのケアをしなければ、先生方に不安が残ると考える。

委員長：義務教育学校をつくる統合は垂直的、一般的な海津小学校のような場合は水平的といったように、学校再編には様々なベクトルがあり、今日発表のあった事例以外のパターンもあれば現状の体制を維持するというパターンもあり得る。様々な選択肢がある中でそれぞれのよさを検討すると同時に、「こうでなければならない」という既成の概念や固定観念を解き放つ必要があるだろう、ということも強く感じた。一方で、どんなことでもできるというわけではないため、様々な諸条件の中で柔軟性をもって我々は検討を進めなければならないと思っている。

〈参加者との意見交換〉

委員長：それでは、会場の皆様にもご意見を伺う。どのような観点からでもよいので、学校教育の在り方に関してご発言等があればお願いしたい。

住民：私は小学1年生の子どもが1人と未就学の子どもが2人いるが、義務教育学校の話は初めて聞き、もし揖斐川町でも7年以内に生まれればきょうだいで同じように通うことができるので、非常によいと思った。

ただ、幼稚園や保育園のようなのびのびとした環境から小学校に入学した時に、座って授業を聞くことをすごくハードに感じている同級生の子どもたちがいる。そうした中で、小学生も45分授業ではなく中学生と同じ50分授業を行っているということだが、この5分の違いによる影響があるのではないかと思い、1年生の子どもたちの様子が気になったためお聞きしたい。

発表者：岐阜市内の小学校の校長にも話しているが、小学校は1年生でも6年生でも45分授業となっていたり、中学校に入ると全員50分授業になったりすることに私は違和感がある。小学1年生の授業時間は15～20分から始めればよくて、例えば長良東小学校では今年、学校に来て20～30分はやってみたい場所でやってみたいことをやる、という時間を位置づけた。

幼稚園などにおいて、年長になると「小学校に入ったらこうしなければならない」と言われるようになるのは間違っていると思っている。子どもの発達から考えると、学校のシステムが合わない子はいて、そうした子が授業で指名してほしくないと思ったとしてもそれは当然である。実は今中央教育審議会でも論議が重ねられているが、そのキーワードとして「多様性の包摂」という言葉が出されている。これは、子どもたちは一人ひとり違うという前提でこれからの時代の教育をする必要があるということであり、すなわち「ただ真面目に取り組むことも大事だが、自分が自分らしく学ぶということはより大事である」ということを文部科学省が考え始めているということである。

学校生活は義務教育の9年間で1,800日あり、毎日5～6時間という膨大な数の授業を受けているが、日本の教育ではその中に自分がやりたいことを極めるための時間が組み込まれていない。本来子どもたちは自分が幸せになるという宿題を解くために学校に通っており、その力をつけるためには、多様性の包摂を保障するような学校の仕組みにする必要があると考えている。

委員：先日の文部科学省の研究会でもこの話題は出されており、例えば幼児教育や特別支援教育などの環境を整え、一人ひとりを丁寧にみて、それぞれが本当に必要とするところを支えるのが教育だと文部科学省も考え始めている。

先ほどの質問に関連して、やはり人の話を聞くことができる子どもに育てていくことは必要だが、幼児期には幼児期の在り方があり、例えば児童期の子どもとは在り方が違う。そこで、子どもがその違いに合わせるのではなく、違いに応じて学校のカリキュラムを考えていく必要があるのではないか。このことが今の文部科学省の課題で、例えばフレネ学校やフレール教育、お茶の水女子大学附属小学校で行われている誘導保育などの様々な方式を踏まえて検討されている。これらは実験的な考え方であるため、すべてを取り入れることは大変難しく、また「子どもたちの育ちのためにどういう教育の在り方がよいか」についてはそれぞれの地域で検討すべきだと思われるので、ただ文部科学省のやり方に合わせるのではなく、中心的な人物となる方が現場へのケアを行いながら一つずつつくり上げていくことが必要だと考える。

委員長：今日2つの事例を発表していただいたが、そうした他地域の事例をただ模倣するのではなく、そこから得たものを練り上げながら揖斐川町の魂を打ち込まなければ、本当の意味での揖斐川町の学校にはならないと考える。

また、日本全体でみると保幼小の連携が遅れており、今後学校教育の在り方を検討するうえでこのつながりは意識しなければいけない、という点は非常に大きなポイントである。

住民：観点は異なるが、持続可能な社会や本当の豊かさとは何かという視点から話をする。私は神職をしながら古民家貸別荘も運営しており、そこでは洗剤を使わずに皿を洗ったり洗濯をしたりしているし、食事についてもだしのもとを使わずに味噌汁を作ったりかまどでご飯を炊いたりしている。こうしたものが、かろうじて残っているのが揖斐川町なのだと思っている。私は20年以上海外で暮らしていたので、外から見たうえでこうしたものが揖斐川町の宝であり、世界に誇ることができる大好きな町だと感じている。だが、日本の教育では、なぜ洗剤を使っはいけないのか、なぜ化学調味料を使わないのかということから先に踏み込むこと

ができていない。一方で、少なくともフランスでは30年前から小学校でそういったことを教えている。

そこで、新しい学校をつくるのであれば、そういったことに踏み込んだ教育をできるようにするとよいのではないか。「揖斐川町の将来を見据えた学校教育」を考えた時に、私は持続可能な社会や本当の豊かさにつながる日常生活を小さな頃から体験できる学校ができれば素晴らしいと感じる。それができれば、恐らく日本を代表するような学校にもなるのではないかと思うし、揖斐川町ならばまだできるのではないか。我々がかつて見てきたそうした日常生活を子どもたちにもつないでいくことができればよい、と考えている。

住 民：まず、小学3年生の子どもから感想を聞く。

住 民：中学校と小学校を合わせたら、9年生などと交流ができて様々なことがわかるので楽しそうだし、合わせたらよいと思う。

住 民：私は子どもが幼稚園の時まで「森のようちえん」で活動しており、年少から年長までの異年齢保育も行っていたが、その中で発達心理学の先生から「本当の異年齢とは7歳の子どもからである」と聞いたことが印象に残っている。聞いた当時はそれほど深く意識していなかったが、コロナ禍で小学校が休校になり森のようちえんに小学生が来た際に、非常に遊びや学習の幅が広がって、幼児も小学生もいつもと異なる姿が見られたり、理科の実験のような遊びが自然に始まったりしていた。また、参加した小学生の一人は、参加するまでは親に「森のようちえんに行かないでほしい」と言っていたが、参加後は幼児と関わることで気持ちが変わったようで、そうした発言がなくなったとのことだった。発表者のお話は様々な先進的で新しいことをされていて非常に魅力的だと思うが、そういった難しいことをしなくても、今も1年生と6年生の交流の時間などをつくっていただいているので、その延長線上で年齢を超えた交流ができればもっとよい効果が生まれるのではないか。

また、今も子どもはバス通学をしているが、始業の30分以上前に学校に着いてしまうため朝が早く、これ以上学校が遠くなると大変である。垂直的な再編であれば個人的にはありがたいし、地域の特色を残すことができるとともに、異年齢の交流の中で成長することで地域への愛着等も育つだろうと思うため、垂直的な方向性に可能性を感じている。

発表者：異年齢という観点では、発表の中でもある作文を出したが、1年生から尊敬される9年生とは勉強ができる子どもでも足の速い子どもでもないということを実感している。やはり人間的な魅力というものが1年生の子どもの目にも映るのだと思うが、こういうことが実は成長の本質だと感じるので、小学校であろうが義務教育学校であろうがそういった本質を見逃さない教育を展開しなければいけない、と考えている。

また、神職の方が言われた話にも、私は賛成である。岐阜市の芥見東小学校では東京大学の教授の協力を得てコミュニティづくりを行ってきたが、その中で「15歳までに地域の方と深く関わる体験をした子どもたちは、社会の中心で働く年齢になった時に必ずもう一度その地域にお返しをしたいという思いが満ちてくる」ということが学術的にも証明されていると説明された。そのことを考えると、ふるさとを忘れない子どもを育てるためには、15歳までの間に徹底的にふるさとの

大人が深く関わりながらふるさとの自然や文化、産業等に深く関わる体験をさせる必要があり、それがなければ外に出ていったまま帰ってこないのではないか。本当に揖斐川町の未来を考えた学校づくりをするのなら、徹底的に学校のカリキュラムの中にふるさとを深く科学するという視点を入れなければならないと考える。岐阜市の先生方にも同じことを話しているが、義務教育学校か小学校・中学校かということは関係なく、例えば谷汲であれば谷汲の本当に深い歴史を大人がしっかり教えて、地域対抗でふるさとのことをどれだけ知っているか競争するくらいのカリキュラムが今の学校教育には必要だと思っている。

委員長：今日のお話を伺う中で、やはり「学校をつくる」ということは「まちをつくる」と恐らく同じなのだと思う。学校づくりとはまちづくりに直接つながるものであり、子どもたちがやはり地域のことを深く学ぶ、それもやらされているのではなく自分たちでつかんでいく、いわゆる「探究」を進めながら異年齢や様々な方と一緒に学んでいくことができる環境を、我々は見定めてつくっていく必要があると強く感じた。

まだご発言いただいていない会場の皆様もいらっしゃるかもしれないが、時間の都合もあるため、今後どのように意見をより聴取していくかという工夫は必要である。ただ、審議会では来年度の3月に揖斐川町のこれからの教育の方向性について答申することを目指しているため、今日発表のあった事例も踏まえつつ、皆様からお気づきの点があればお寄せいただきたい。それを受けて審議会でもさらに深めていくとともに、審議会の様子を町のホームページにて発信していくので、そちらもご覧いただければと思う。

(5) 閉会挨拶（大西委員）

- ・ 揖斐川町においてもこれまで順次学校統合を行ってきたが、自治体全体での再編や義務教育学校の設置などの様々な道筋があること、またそこに至るまでの過程や現在の学校の具体的な様子を聞くことができ、再編について検討するうえで考えなければならないことや子どもたちの実際の様子を知ることができ、大変参考になった。
- ・ 審議会では、今後シンポジウムや地区集会でいただいたご意見を踏まえて審議を進めていく。その内容や進捗状況は議事録などで発信するため、審議の行方を注視しながらともに考えていただくようお願いを申し上げます。

以上、閉会